

# 南チロルの現代ドイツ語文学<sup>1)</sup>

(平成19年11月30日 受理)

人間科学講座 今井 敦

## Deutschsprachige Literatur Südtirols seit Ende der 60er Jahre

(Received November 30, 2007)

Kyushu Institute of Technology Atsushi IMAI

南チロルは、第一次大戦後にオーストリアからイタリアに割譲された地域であるが、現在でも、人口の70パーセント近くを占めるのは、ドイツ語を母語とする住民である<sup>2)</sup>。この地域では、母語による教育や、イタリア語と並ぶ公用語としてのドイツ語の地位が保証されていることもあって<sup>3)</sup>、今日大変盛んなドイツ語での文学活動が展開されている。本論では、南チロルにおける現代ドイツ語文学に関して、その出発点と考えられる1969年の状況と、特に注目し値する幾人かの作家を紹介し、彼らに共通する特徴を浮き彫りにする。それによって、彼らのテキストが、地元でしか意味を持たない郷土文学<sup>ハイム・リテラチャー</sup>ではなく、多文化社会に特徴的な問題を先取りした、反ナショナリズムの文学であることを明らかにしたい。

まずは簡単に、イタリア割譲から現在に至るまでの南チロルの歴史を振り返り、今日の南チロルの社会的文化的状況をおさえておくことにする。今日、正式名称を、「ボーツェン＝南チロル自治県」Autonome Provinz Bozen-Südtirol<sup>4)</sup>と言うこの地域は、イタリア割譲当時、人口約24万のうちの90パーセントがドイツ語を話す住民であり、4パーセントが、レト・ロマンス語の一種であるラディン語を話す人びと、そしてわずか3パーセントほどがイタリア人であった<sup>5)</sup>。

しかし、ファシズム政権下において徹底したイタリア化政策が進められ、ドイツ語の授業は禁止、ドイツ語の苗字や名前もイタリア語に改めさせる措置がとられた。一方で、大勢のイタリア人労働者の入植政策が進められ、1910年には7千3百人に過ぎなかったイタリア人の数は、1939年には8万1千人に達していた<sup>6)</sup>。この年、ナチス・ドイツとファシズム・イタリアのあいだで、ドイツ語住民の移住に関する協定が結ばれ、約7万5千人の人びとが、ドイツ国内に移住することになる。

第二次大戦後、南チロルは、住民投票を認められないままイタリア領にとどめられた。その代りにオーストリアとイタリアのあいだで協定が結ばれ、母語による授業、ドイツ語とイタリア語の同格化、民族性の保護、自治権の付与などが約束された。イタリア政府はしかし、この約束をなかなか実行しようとしなかった。一方で南イタリアからの入植政策は続けられたため、自治を要求する住民運動が高まり、国連の議題として審議されると同時に、南チロル内では一連の爆破テロ事件をも引き起こした。結局、1969年に、

イタリア政府が大幅な自治権を南チロルに認めたことで合意を見たが、そのとき約束された法的措置が順次実現され、自治制度がほぼ完成するまで、20年以上の歳月を要している。南チロル問題の解決が国連に報告されたのは、1992年のことである。

現在の南チロルは、比類ない自治制度の下<sup>7)</sup>、とりわけ観光業の隆盛のおかげで、イタリアでもっとも裕福な県の一つとなっている。その反面、ドイツ語住民とイタリア人の軋轢は大きな社会問題であり、住民は常に、チロルの文化とイタリア文化、そして、ドイツ語、イタリア語、ラティン語という三つの言語の交錯する社会の中で、日々を送っている。

さて、これから南チロルの現代文学について述べる前に、まず、一体何を持って「南チロルの文学」と言うのか、定義の問題に触れておきたい。「南チロルの文学」とは、南チロルに住む人たちの文学なのか、それとも、南チロル出身者が書いた文学なのか、あるいは、作者がどこの人であろうとも、南チロルを描いていれば、それを「南チロルの文学」と呼ぶのか、そうした問いが生ずるであろう。これらの問いに対しては、次のように答えておくことにする。すなわち、ここで「南チロルの文学」と言うのは、南チロル出身、または南チロルに定住する作家が書いた文学テキストの中で、南チロルという歴史的、社会的、言語的に見て独特な環境が、表現面または内容面で大きな役割を果たしているテキスト、しかも、文学的に質の高いものである。

ドイツ語圏の研究者や批評家のあいだでは、*Südtiroler Literatur* とか、*Literatur aus Südtirol*、*Literatur in Südtirol* など、様々な呼び方がされているが<sup>8)</sup>、文学史的概念として確定しているわけではない。また、これから紹介する作家たち自身は、そうしたカテゴリーで括られることに抵抗感を示している。彼らは、自分の書いた文学テキストが *Heimatliteratur* とみなされることを嫌っており、また、自分たちがいわゆる *Minderheitenliteratur* に属するとも考えてはいない。なぜなら彼らは、ドイツ、オーストリア、スイスといった大きなドイツ語文化圏から切り離されているわけではなく、自治制度の確立している現在、他の文化に脅かされているわけでもないからである。

それにもかかわらず、私が「南チロルの現代文学」として彼らを紹介するのは、彼らのテキストが、次の五つの点で、南チロルという多言語・多文化社会に特有の問題を扱っていると考えるからである。その五つの点、彼らに共通する五つの特徴の第一は、いずれの作家も、60年代まで南チロルで主流だった *Heimatliteratur* に否を唱えている、ということである。第二点は、彼らが、イタリア割譲後の南チロルの歴史を、テキストの背景、あるいは前提として描いているということであり、第三は、彼らが、南チロルに住むドイツ語住民とイタリア人の複雑な関係を問題にし、文化の狭間に立たされた人間の心理的葛藤を描いていること、第四に、彼らのテキストでは、言語についての劣等感が繰り返し語られ、この過剰な言語意識が、*Heimat* に対する彼らの複雑な思いと密接に結びついていること、そして第五番目として、彼らの文学には、異なる世界への憧れを読み取ることができる、ということである。

では、具体的に見ていく。南チロルの現代文学の出発点は、60年代の終りにあると考えられる。そのはっきりした道しるべと言えるのが、1969年に、詩人ノルベルト・コンラート・カーザーがブリクセンで行なった講演『過去二十年間および将来の南チロルの文学について』<sup>9)</sup>である。当時二十二歳のカーザーは、この講演を南チロル学生会の年次大会

で行っており、その内容は、それまで南チロルで書かれてきた「文学」に対し、反抗心をむき出しにしたものであった。この講演は、新しい世代による古い世代への挑戦状と言える。「南チロルの文士の99パーセントは、生まれてこなければよかったのだ。彼らが、今でも故郷について下らぬことを書きなぐっているのは構わないが、それ以上の災いは御免こうむりたい。」<sup>10)</sup> こういう挑発的な言葉で語り始めたカーザーは、当時南チロルでもはやされていた幾人かの作家と、一人の独文学者を、槍玉にあげた。それは、戦前、戦中、そして戦後も中断されることなく書かれてきた、故郷を讃えるだけの凡庸な文学の伝統、それと密接に結びついたナショナリズムとの対決であった。

カーザーが攻撃した郷土作家たち、すなわちヘルマン・ムーメルター、フーベルト・ムーメルターといった人たちは、牧歌的理想郷としてのHeimatを安っぽい哀感を込めて歌い上げ、ドイツ的である筈の南チロルがイタリア領となったことを嘆くばかりであった。カーザーから見て彼らは、未だゲーテの垂流に過ぎず、モデルネ以降の文学の流れからは遠くにいた。しかも、南チロルの歴史や、人びとが直面している様々な問題を文学的に扱うことを、意識的に避けていたのである。加えて、当時インスブルック大学教授であった独文学者オイゲン・トゥルンヘアの世界観は、カーザーによれば、「白痴的」でありまた「ナチス的」ですらあった。かれこれ半世紀にも及ぶイタリア支配のあいだ、南チロルにイタリア文学と言えものは芽生えることがなかった。ドイツ語文学ばかりが生まれている。南チロルのドイツ性を証明するこれ以上確かな証しがあるだろうか？ おおよそこういう風に、トゥルンヘアが述べていたからである。

カーザーの批判の背景には恐らく、一方では、南チロルの自治権運動に見られた、住民総動員の政策を進める県政府への反発と、他方では、南チロルでも例外なく燃え上がった、68年運動への呼応という要因が考えられる。

カーザーがこの挑発的講演を行った1969年は、ちょうど南チロルがイタリア政府に対し、新しい自治制度を認めさせた年に当たっている。自治権を求めた一連の交渉の中で、県政府は、南チロルの文化がドイツ的でありまたラディン的である点を強調しており、文化政策においても保守的、民族的なものを奨励していた。つまり、当時の南チロルでは文学もまた、政治の道具とされる状況にあったわけである。カーザーは、南チロルに導入された自治制度を、イタリア人を差別し、三つの言語グループのあいだの溝を固定化させる、いわば「アバルトヘイト」として批判した。カーザーはさらに、南チロルの文化が閉塞し、画一化されていることへの責任が、次の三つのメディアにあることを指摘した。

三つのメディアとは、南チロルで圧倒的購読率を誇るドイツ語日刊紙「ドロミーテン」と、その発行元であり、カトリック関連の書籍や地元の風物案内のような本ばかりを出していたアテージア書店、そして、イタリア国営放送RAIのポーツェン支局である。特に出版社アテージアと日刊紙「ドロミーテン」は、故郷の文化が苦境に立たされている、という危機感をあおり、ゲルマン的かつカトリック的なチロルの伝統文化を守ろうとする傾向が明らかだった。当時のアテージア書店の社主であり、「ドロミーテン」の編集主幹でもあったミヒャエル・ガンパーは、ファシズム支配下で南チロルのドイツ語教育を守り、ナチズムに対しても抵抗を示した功労者ではあったが、戦後この地域の言論、出版界は、あまりにも彼一人を中心に回っており、日刊紙「ドロミーテン」は、南チロ

ルで圧倒的支持を集める政党、南チロル人民党 (Südtiroler Volkspartei)<sup>11)</sup>の機関紙ともみなされていた。一方、RAI ボーツェン支局は当時、まだ素人の集まりと言うべき状態で、文化的フォーラムとしての役割を果たすには至っていなかった。

カーザーは、同じ講演の中で、これまでの南チロルの文学からは一線を画した新しい世代の到来を告げ、「期待すべき文学者」として幾人かの名前を挙げた。そこで名前の挙げられた一人が、ヨーゼフ・ツォーデラーである。ツォーデラーはカーザーよりも12歳年上ではあるが、院外野党運動の申し子的なジャーナリストであり、南チロルの「アパルトヘイト」にはもとより批判的であった。とはいえツォーデラーが注目されるようになったのは、何と言っても彼のテキストの文学的質の高さと、これまで南チロルの文学には例のなかった斬新な手法ゆえである。初め彼は、詩によって成功した。彼は、南チロル方言というものを、社会批判的内容を表す詩的言語として開拓し、方言で書いた最初の詩集を74年に出版した。「ティンパニーが轟くように、南チロルの文学的静けさを打ち破った」、と、ある文学批評家は書いた。

そのヨーゼフ・ツォーデラーが、物語作家としての才能を疑いえない形で開花させたのは、彼が出版した最初の二つの長編小説、『手を洗うときの幸福』(Das Glück beim Händewaschen)と『イタリア女』(Die Walsche)であった。76年にミュンヘンで出版された『手を洗うときの幸福』は、自伝小説、あるいは私小説と言ってよいものと思われる。スイスのイエズス会系寄宿学校に入った十代半ばの主人公「私」は、自らの故郷、属すべき国、アイデンティティをなかなか見出すことができない。この小説は、周囲への順応と反抗のあいだを揺れ動く不安な青年心理を、青年自身の視点から描き出している。

主人公は、南チロルのメラーンに生まれ、幼いころ、ヒトラー＝ムッソリーニ協定のために家族とともに故郷を捨て、グラーツに漂着した。作中には、グラーツで過ごした少年時代の思い出や、兄から聞いたメラーン時代の一家の暮らしなどが、フラッシュバックとして随所に挿入されている。国籍のないパスポートを持つ主人公のもとに、ある日、イタリアの旅券が届けられ、彼はつかの間、自分の属すべき場所が決まったことを喜ぶが、夏休みに生まれ故郷を訪れた彼は、そこがまったく見知らぬ土地であり、自分がそこでもまたよそ者に過ぎないことを痛感する。

主人公がアイデンティティを確立しえない要因は、国籍よりもむしろ言語にある。彼は、家族と話すときは南チロル方言で話し、少年時代にはグラーツ方言を身につけ、今は学校友達とスイス・ドイツ語で話している。が、そうした多言語話者である彼も、南チロルに入る際、国境警備員にイタリア語で話しかけられたとき、一言も答えることができない。口にしたわずかなドイツ語すら、吃つたものになってしまう。彼はつまり、故郷に戻ろうとして、自分の話す言葉に自信を失い、それによってまた、自分のアイデンティティにもひどい不安を感じてしまうのである。

ツォーデラーの次の長編小説『イタリア女』は、1982年のインゲボルク・バッハマン・コンクールで高く評価されたものである。この小説は、南チロルに並存する二つの社会、ドイツ語住民の社会とイタリア人社会のあいだに立たされ、どちらに属することもできない人間の、心の葛藤を描いている。

主人公オルガは、南チロルの小さな農村に生まれるが、家を飛び出し、ボーツェンの町で知り合ったイタリア人ジルヴァーノと同棲生活をしている。父の死の知らせを受け、

葬儀のため故郷の村に帰った主人公の、わずか三日間の心象風景を、百ページ余りにわたって綴ったのが、この小説である。オルガの意識に浮かぶ様々な想念が、出来事の時間的前後関係にはこだわらず、浮かんだままに語られる。

ドイツ語を話す農民たちの、狭く、閉鎖的な社会に戻ってきたオルガは、イタリア人と同棲しているがゆえに、Die Walsche (イタリア女) と罵られる。ところが彼女は、ポーツェンのイタリア人街に住み、イタリア人に囲まれているときも、やはりよそ者である。母語のようにイタリア語を操ることができないため、恋人にさえ、本来の意図とは違った風に解釈され、滑稽な人物だと思われる。そもそも彼女は、「本来の自分」と言えるものを見出すことができない。境界をまたいで行き来する人間のこうした疎外感が、この小説のテーマとなっている。

この小説では、主人公の姿が肯定的に描かれているのに対し、村人たちは、料簡の狭い排外主義者として批判的に描かれている。Walsche という言葉自体が、この地方でイタリア人を侮蔑的に呼ぶときの罵り言葉であるが、この小説は、南チロルのドイツ語社会が持っているそうした閉鎖性を、いわば内部告発した作品とすることができる<sup>12)</sup>。

ツォーデラーのテキストにはまた、それを愛着と言うにせよ反発と言うにせよ、Heimat への過剰な意識と、異なる世界への憧れ、旅立ち、といったモチーフが繰り返し表れている。こうしたモチーフはまた、彼の世代に始まる新しい南チロルの文学に共通のものである。例えば、イタリア文学に傾倒し、イタリア語でも創作したノルベルト・C・カーザーや、イタリア語版とドイツ語版の両方を並べる形で詩を発表したゲルハルト・コフラーにもあてはまる。しかし、こうしたモチーフが特にはっきり表れているのは、80年代に『垣根を越える女』(Zaunreiterin) で注目を浴びたアニータ・ピヒラーと、ピヒラー作品集の編者であり、90年代に作家として登場したザビーネ・グルーバーの二人である<sup>13)</sup>。

アニータ・ピヒラーの難解なテキストについては、別の機会に詳しく論じることにする。1963年にメラーンに生まれた作家ザビーネ・グルーバーは、最初の長編小説『帰らぬ子ら』(Aushäusige) によって、多くの読者を獲得した。

この小説は、96年にクラーゲンフルトの小さな出版社から上梓されたが、ペーター・ハントケらが高く評価し、dtv-taschenbuch の一冊に採用されている。小説のテーマはまさに、異なる世界への憧れである。若い兄と妹、アントンとリータそれぞれが語るモノローグが、章ごとに交代しながら進んでゆく。兄アントンはヴィーンに暮らし、ジャーナリストとしてのキャリアを積んでいる。一方、妹リータはイタリア人の魚屋エニオと結婚して、ヴェネチアに住んでおり、それぞれが、出身地である南チロルの狭苦しい山村から飛び出して、異質な環境の中で新しい自分を作りあげようとしている。リータは魚が苦手だが、無理に慣れようとし、ヴェネチア方言を習得する努力をして、人に根っからのイタリア人だと思われる、喜びを感じる。アントンは、標準ドイツ語を使いこなすことのできない、「どもり言葉の国」、つまり、南チロルの出身であるというハンディを克服するため、必死に記事を書いている。

この小説では、ヴェネチア、ヴィーン、クラーゲンフルト、そして南チロルという舞台、そのあいだを行き来する兄と妹を描くことによって、ドイツ語圏とイタリアという、二つの世界をまたいで生きる Grenzgänger の心理が浮き彫りにされている。リータは、ヴェ

ネチアでの生活に順応することができず、夫エニオを捨ててヴィーンの兄のもとに身を寄せるが、そこにも自分の居場所を見出すことができず、クラゲンフルトに移り、最後にはヨーロッパ大陸をあとにする。彼女の姿には、ツォーデラーの小説にも繰り返し表れた、探し求める人としての南チロル人を見出すことができる。それは、決して安住の地に落ち着くことがなく、自分の属すべき場所を求め、幸福を求めて、さまよい続ける人である。

同じことはまた、主人公二人の、言語に対する劣等感にも表れている。ドイツ語とイタリア語の両方に堪能である彼らが、実はその両方において不足を感じ、この不足感を、一方はヴェネチア方言に習熟することによって、他方は標準ドイツ語で書くという行為によって補おうとする。それがまた、故郷の村では見出すことのできなかつた自らのアイデンティティを作り上げるという試みでもあるわけである<sup>14)</sup>。

グルーバーより九歳年上になるが、1954年にアイザック河畔の町ブリクセンに生まれたヘレーネ・フレスは、90年代初めから、ブルゲンラントで中学教師をするかたわら、南チロルの歴史に取材した小説を世に出している。その一つが、2000年に出版された長編小説『型紙』(Schnittbögen)である。この小説は、1930年代から40年代にかけて、つまり、第二次大戦を挟んでファシズムとナチズムのあいだで揺れた時代の南チロルを舞台としている。南チロル方言や、イタリア語、ラディン語の文章が散りばめられており、しかも、この時期に南チロルで起こった政治的、社会的事件が、詳しい説明のないまま背景に描かれているため、地元の言葉や歴史に詳しくない読者にとって、少々読みづらいものとなっている。

枠物語であるこの小説は、90年代に再会した二人の老女、エルザとオルガが対座する場面から始まり、同じ場面で終わる。枠の中身となっているのは、エルザが若き日に書いた日記や、出征した恋人がオルガに宛てて書いた、沢山の手紙である。ここに描かれているのは、悲惨な時代を自分なりに生きた、二人の対照的な女の姿である。一方は、洋裁師としての才能を開花させ、商売上の成功を収めながら、失踪した夫を生涯待ち続ける女であり、他方は、戦地から熱烈な愛を綴った多くの手紙を受け取りながら、その恋人が戦死したあと、まもなく幸福な結婚を遂げて二度と手紙を読むことのなかった女である。この二人と、二人を取り巻く人びとを通じて、政治や戦争という大きな出来事に翻弄された、小さな人びとの内面が浮き彫りにされている。

ヘレーネ・フレスは、2003年にも、南チロルの歴史に取材した小説『木の中のライオン』(Löwen im Holz)を出版したが、そこでは、1910年代、つまりオーストリア時代まで遡って、この地の人びと、つまり南チロル人やラディン人、イタリア人の姿を描いている。

ヘレーネ・フレスよりも一つ年下、つまり1955年生まれのゼップ・マルは、エッチュ川の源、すなわちオーストリア・チロルとの国境に近い村、グラウンの出身で、現在メランの町で中学教師をしながら、詩や小説を書いている。マルは、2004年に初めての長編小説『傷跡の縁』(Wundränder)を発表したが、この小説もまた、政治に翻弄される弱い立場の人びとを描いたものといえる。小説の背景となっているのは、60年代に南チロルで荒れ狂った一連の爆破テロ事件である。この爆破テロは、南チロルのオーストリア返還を求めて、急進的活動家たちが起こしたものであるが、物語の中心に描かれているのはむしろ、死んだ活動家の残された家族である。一方は、自分で仕掛けた爆破テロによっ

て命を落とした、どもりの青年の姉、ヨハンナであり、もう一方は、テロリストのメンバーとして逮捕されたあと、釈放されたものの、「裏切り者」のレッテルを貼られて自殺した男の家族、とりわけ息子のパウルである。物語は、少年パウルの視点から語られた章と、ヨハンナの視点から語られた章が、交代する形で進んでゆく。簡単にまとめればこの小説は、南チロルのイタリア帰属とかオーストリア帰属、といったナショナリズムの思想や運動が、そうした思想とはまるで関係のない人びとを不幸にしていくさまを描いている。物語は、パウル少年とヨハンナが会うところ、つまり二人の人生が交差するところで終る。ナショナリストたちの主張をよく理解できず、民族性の違いといったものに何のこだわりも持たない十二歳の少年パウルは、カラビニエリの宿舎で、イタリア人に囲まれながらサッカー中継を見たり、イタリア人少女と付き合ったりしている。逆に、ヨハンナの弟アレクサンダーは、どもりであるがゆえに自己表現がままならず、爆破テロという暴力的手段のうちに、抑圧的国家や多数派に対する自己主張の方法を見出すようになる。この二人は、対照的な若者として、しかし両者ともに犠牲者として描かれている。それゆえこの小説からは、意外なほど明瞭なメッセージが読み取れる。それは、ドイツ的な故郷を防衛する、とか、「ここはイタリアなのだ (Siamo in Italia)」といった主張に表れた、ナショナリズムへの懐疑である。これはまた、68年運動に出発点を持つ、現代南チロルの文学に共通する傾向でもある。

現代南チロルのドイツ語文学は、多文化社会に生きる人間が直面する様々な問題を描き出している点で、時代を先取りしたものであり、身近な地域社会を描くことによって、むしろ、一地域に限定されない人間の問題に迫ろうとしている。それは、異なる世界への憧れを内に秘めながら、南チロル方言やラディン語などを表現手段に用いている点に見て取れるように、辺境地域の持つ多様性を生かした文学となっている。この意味で、南チロルの現代文学は、国家や民族ごとに文化を均質化する方向に働く、いわゆる *Nationalliteratur* の対極に置かれるものではなかろうか。

## 参考文献

- L1: Norbert C. Kaser: *Südtirols Literatur der Zukunft und der letzten zwanzig Jahre* („Brixner Rede“), in: Norbert C. Kaser: *Gesammelte Werke Bd.2 Prosa*, Innsbruck (Haymon) 1989, S.111-118.
- L2: Joseph Zoderer: *Das Glück beim Händewaschen. Roman*, München/Wien (Hanser) 1982 (erstmalig bei Relief, München 1976).
- L3: Joseph Zoderer: *Die Walsche. Roman*, München/Wien (Hanser) 1982.
- L4: Sabine Gruber: *Aushäusige. Roman*, München (dtv) 1999 (erstmalig bei Wieser, Klagenfurt/Celovec 1996).
- L5: Helene Flöss: *Schnittbögen. Roman*, Innsbruck (Haymon) 2000.
- L6: Sepp Mall: *Wundränder. Roman*, Innsbruck (Haymon) 2004.
- L7: Gerhard Mumelter: *Südtirol – 11 Ansichten*, in: *Drehpunkt*, 12 (1980), Nr. 48/49, S.96-100.
- L8: Hans-Georg Grüning: *Die zeitgenössische Literatur Südtirols. Probleme, Profile, Texte*, Ancona (Edizioni Nuove Ricerche) 1992.

- L9: Johann Holzner: *Literatur in Tirol (von 1900 bis zur Gegenwart)*, in: *Handbuch zur neueren Geschichte Tirols*, Bd. 2: *Zeitgeschichte*, hgg. von Anton Pelinka und Andreas Maislinger, 2. Teil: *Wirtschaft und Kultur*, Innsbruck (Wagner) 1993, S. 209-269.
- L10: *Dossier Südtirol*, zusammengestellt von Andreas Reiter. In: *Literatur und Kritik*, H.285/286, Juni 1994, S.48-86.
- L11: Johann Holzner (Hrsg.): *Literatur in Südtirol*, Innsbruck/Wien (Studien) 1997.
- L12: Beatrice Simonsen(Hsrg.): *Grenzüme. Eine literarische Landkarte Südtirols*, Bozen (Edition Raetia) 2005.
- L13: *(W)orte. Words in Place. Zeitgenössische Literatur aus und über Südtirol. Contemporary Literature by German-Speaking Minority Writers from South Tyrol (Italy)*, herausgegeben, kommentiert und übersetzt von Siegrun Wildner, Innsbruck/Bozen/Wien (Skarabaeus) 2005.
- L14: Wolfgang Pfaundler: *Tirol in Vergangenheit und Gegenwart*, Innsbruck (Inn) 1989.
- L15: *Die Option. 1939 stimmten 86% der Südtiroler für das Aufgeben ihrer Heimat. Warum? Ein Lehrstück in Zeitgeschichte*, hrsg. von Reinhold Messner, Aktualisierte Neuauflage, München/Zürich (Piper) 1995.
- L16: Rolf Steininger: *Südtirol im 20. Jahrhundert. Vom Leben und Überleben einer Minderheit*, Innsbruck/Wien (Studien) 1997.
- L17: Michael Forcher: *Tirols Geschichte in Wort und Bild*, Innsbruck (Haymon) 2000.
- L18: Alfons Gruber: *Geschichte Südtirols. Streifzüge durch das 20. Jahrhundert*, Bozen (Athesia) 2000.
- L19: *Volkszählung 2001/ Censimento della popolazione 2001*, ASTAT (Landesinstitut für Statistik – Bozen / Istituto provinciale di statistica – Bolzano) Information/Informazioni Nr. 17, August 2002.
- L20: *Südtirol-Handbuch*, hrsg. von der Südtiroler Landesregierung. 26. überarbeitete Auflage, Bozen 2007.

- 1) 本稿は平成17年度より交付を受けている科学研究費補助金（基盤研究（C））の研究成果の一つであり、日本独文学会西日本支部 第59回研究発表会における研究発表「南チロルの現代文学事情」（平成19年12月8日）に加筆したものである。
- 2) 2001年度統計によると、総人口460,635人のうち、有効な回答をした428,691人の69.15パーセントがドイツ語を母語とする者、26.47パーセントがイタリア語の母語話者、4.37パーセントがラティン語を母語とする人びとである。Vgl. L19, S.4f.
- 3) 「トレンティーノ・南チロル州の為の特別規約」第99条には、「ドイツ語は、当州においては、公用国家語であるイタリア語と同格とする」と記載されている。Vgl. *Statuto speciale per il Trentino-Alto Adige / Sonderstatut für Trentino-Südtirol* (Dekret des Präsidenten der Republik vom 31. August 1972, Nr. 670), XI, 99.
- 4) イタリア語名は *Provincia Autonoma di Bolzano-Alto Adige* である。
- 5) 今日「南チロル」と言った場合、その南側に隣接し、南チロルと共に一つの州を構成するトレント県 (*Provincia Autonoma di Trento*) は含まない。トレント県も1919年まではオーストリア領であり、長いあいだチロルの一部ではあったが、*Welschtirol* という当時の通称が示すとおり、オーストリア時代から既に人口の大部分をイタリア人が占めていた。今日、ボーツェン=南チロル自治県とトレント自治県がそれぞれ大幅な自治権を獲得したため、トレンティーノ・南チロル自治州 (*Regione Autonoma Trentino-Alto Adige / Autonome Region Trentino-Südtirol*) は空洞化してお



り、まとまりを持った一つの州とは言えなくなっている。なお、以下では南チロルやトレント県に住むドイツ語母語話者を「ドイツ語住民」、ラディン語母語話者を「ラディン人」、イタリア語母語話者を「イタリア人」と呼ぶが、これはドイツ語で一般的な *Deutschsprachige, Ladiner, Italiener* に対応させたものである。いずれも、国籍から言えば、オーストリア時代はオーストリア人であり、イタリア割譲後はイタリア人であるが、民族的自覚に即した呼び方を採用する。また、南チロル人 *Südtiroler* とドイツ語で呼ぶとき、一般的には南チロルに住むドイツ語住民とラディン人のみを指しており、本論でもこれに従う。

- 6) Vgl. L17, S.335.
- 7) 南チロルの自治制度は二つの柱を持っている。二言語併用と民族的配分である。南チロルでは、公的な文書や表示はイタリア語とドイツ語の両方で表記するのが原則である。また、母語による教育が保証されているばかりでなく、小学二年からドイツ語母語話者はイタリア語を、イタリア語母語話者はドイツ語を学ぶことが義務づけられており、公的、半公的職業に就くためには両言語の能力試験に合格しなければならない。加えて、こうした職業や社会住宅などは、各言語話者が人口に占める割合に応じて配分される。
- 8) 南チロルの文学を包括的に論じたものとしては、L8からL13がある。
- 9) L1, S.111-118.
- 10) Ebenda, S.111.
- 11) 南チロル人民党 (*Südtiroler Volkspartei*) は、1945年5月8日に、ファシズムとナチズムに対する抵抗運動を母体として、民族自決権行使を目標の一つに掲げて創設された政党である。60年代末までは常に60パーセントを超える支持率を誇っていた。現在でも50～60パーセントの支持率を得ており、県知事を始め県政府の主要なポストをおさえている。Vgl. L20, S.73-90.
- 12) この小説は、ドイツ語圏のみならず、イタリアでも大変多くの読者を獲得し、イタリア語訳はイルミオ・カトゥーロ賞というイタリアでは極めて権威ある賞を受けた。しかし地元南チロルでは徹底的に無視され、作者ツォーデラーはしばらくの間「裏切り者」のレッテルを貼られてボイコットされることになった。彼は、ウィーンを離れて南チロルに戻ってきた当初から、積極的に院外野党運動にかかわり、南チロルの政治の保守性、社会の閉鎖性、文化の画一性を批判してきたが、現在も、民族間の垣根を越えて開かれた、多文化共存社会の実現を訴えている。
- 13) ヨーハン・ホルツナーによれば、1989年、南チロルの自治制度が完成に近づいていたころ、ポーツェン県知事は、南チロル人民党では強硬派のジルヴィウス・マツニャーゴから、比較的穏健なルイス・ドゥルンヴァルダーに交代し、これと同時に文化政策にも転換がもたらされた。文化担当参事の秘書として作家のアルミン・ガッターが起用され、それまでは批判者であり裏切り者として敬遠されてきた作家たちが、むしろ先見の明ある者として評価され、彼らの意見が聞かれるようになったという。Vgl. L9, S.265.
- 14) 作者ザビーネ・グルーバー自身、大学語学講師としてヴェネチアで働き、作家のための市の奨学金を得てクラークンフルトに住み、現在ウィーンに住んでいる。彼女は、『婦らぬ子ら』のあと、詩集 *Fang oder Schweigen* (2002)、長編小説として *Die Zumutung* (2003) と *Über Nacht* (2007) を出している。